高山との交流４４０年記念

金森長近がつないだ越前大野と飛騨高山

協力：高山市教育委員会



戦国武将・金森長近公は、大野城を築き、今の街並みの基盤となる城下町を整備したのち、飛騨高山へと移りました。この歴史的な良縁がもととなり、現在も両市の間では温かな交流が続いています。

今年、長近公が大野から高山へと移り、両市の絆が結ばれてちょうど４４０年を迎えました。節目の年を記念し、史料をもとに、長近公が大野から高山へ移るまでの足跡を辿ります。

展示期間：６月２３日（火）～８月３０日（日）

大野時代 の 長近

天正３年（1575）、織田信長（おだのぶなが）の家臣・金森長近は、大野郡の一向一揆を平定した恩賞として大野郡を与えられました。

それまでまとまった領地を持たなかった長近にとって、大野は渇望した領地であり、亀山山頂に大野城を築き、その東側に大野城下町を整備しました。

城下町は、現在の大野市街地の原型となりました。

「寛政重修諸家譜」

７月、織田信長が加賀・越前を征伐した際、金森長近は越前国大野郡に攻め入り、城を攻略して多くの敵勢を討ち取りました。その功績によって、長近は大野郡の領地を恩賞として与えられました。

「金森先祖書」（『飛騨志金森家譜 并 系』所収）

７月、加賀・越前の二州が平定された際、金森長近は越前国大野郡において十万石の領地を授けられました。

「織田軍記」

越前国は北陸道全体を統括する拠点として極めて重要な地であるため、柴田勝家に一国を与えられた。ただし、敦賀郡は以前の通り武藤舜秀（きよひで）が治め、大野郡の三分の一を原政茂に、三分の二を金森長近に与えた。彼ら（武藤・原・金森）は皆、柴田勝家の補佐（与力）として配属された。

「春日山記」

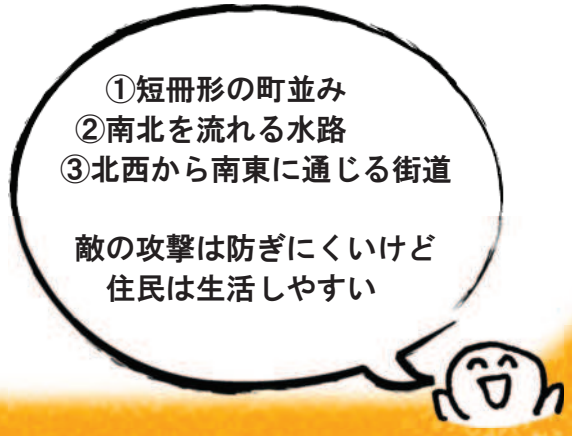
８月、朝倉氏の旧家臣たちが一揆を起こしたため、信長・信忠親子は越前へ出陣してことごとく攻め伏せ、国中を平穏に鎮めました。信長はその家臣である柴田勝家に越前を与えて北ノ庄城（福井市）に居城させ、北陸地方の守り（鎮め）としました。また、同国の府中城（越前市）を前田利家に与え、同じく大野を金森長近に与えて、それぞれ勝家の補佐役（与力）としました。

「金森靱負由緒書」

７月、金森長近は越前国大野郡の十万石を信長より賜りました。そこで直ちに、大野城は自分自身で設計（縄張り）を行い、築城いたしました。

※現代語に訳すにあたり、適宜、理解に必要な除筆・加筆を行いました。以降のパネルについても同様です。





本能寺の変 と 長近

大野郡を与えられたとき、長近はすでに５２歳と高齢で、このまま生涯を閉じてもおかしくない年齢でした。ところが、天正１０年(1582)６月２日、長近の人生を揺るがす大事件が起きました。本能寺の変です。信長が家臣・明智光秀の裏切りにより、本能寺（京都市）で自害しました。

当時すでに５９歳となっていた長近は、突然、主を失ったのでした。しかもこの本能寺の変では、織田信忠に仕えていた長則（長近の嫡男）も、二条城（京都市）で命を落としました。



「金森家譜」（『斐太後風土記』所収）
金森長近には二人の息子がいました。長男の長忠と、次男の長則です。長則は織田信忠に仕えていましたが、天正１０年６月２日、信忠が京都の二条城で自害した際、長則もそれに殉じて討ち死にしました。１９歳でした。

「金森先祖書」（『飛騨志金森家譜 并 系』所収）
６月２日、明智光秀が京都において謀反を起こし、本能寺と二条城にて信長公・信忠公の父子を殺害しました。嫡子（跡継ぎ）の金森長則も信忠公に従って戦死したという知らせを、長近は越前大野にて受け取りました。

主君を失った信長軍団の諸将たちは光秀を討つこととなり、６月１３日、長近は羽柴（のちの豊臣）秀吉に従い、山崎の戦い（京都府南西部）に参加しました。

「金森家譜」（『斐太後風土記』所収）
６月、明智光秀が、山城国（京都府）の本能寺において、信長を殺害しました。長近は光秀を討ちたいと願い、そこで豊臣（羽柴）秀吉公の指揮下（軍門）に加わりました。

「金森先祖書」（『飛騨志金森家譜 并 系』所収）
長近は摂津国（大阪府・兵庫県の一部）に至り、秀吉に従って山崎の地で明智軍と戦い、敵兵を打ち破りました。

信長の葬儀 と 長近

光秀討伐が一段落し、１０月１５日、大徳寺（京都市）で信長の葬儀が行われると、山崎の戦で軍功を収めた長近は列席を許されました。

「絵本太閤記」
織田信長の追善供養における焼香の順列：
筆頭は三法師（秀信）の名代として、羽柴秀吉。
山崎の合戦における軍功によって、席次の順位を上げられた者は…金森五郎八長近



秀吉・勝家の対立 と 長近

信長の築いた勢力を誰が引き継ぐか。北ノ庄（福井市）の柴田勝家と秀吉は意見を対立させ、次第に武力衝突が想起されるようになりました。

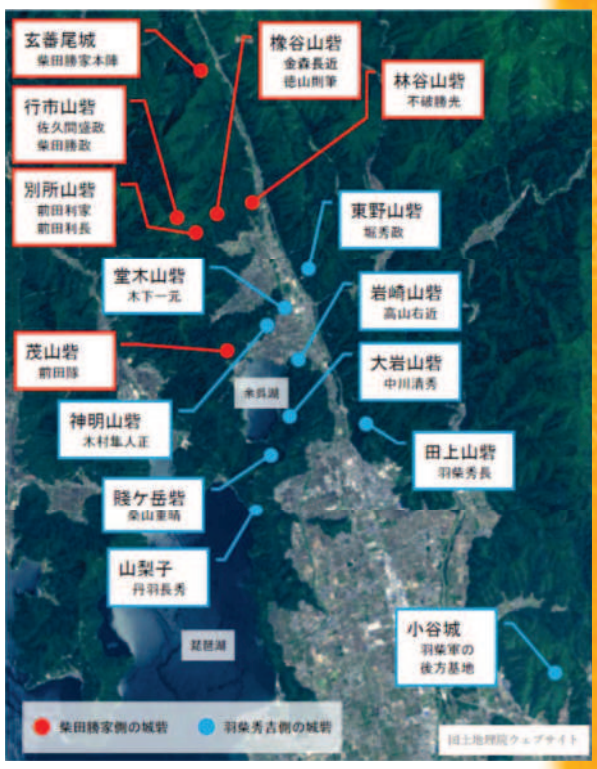
味方の数で劣る勝家は態勢が整うまでの時間稼ぎのため、長近、前田利家、不破勝光を秀吉へ派遣し、「偽りの和睦」を結びました。



「絵本太閤記」
１０月１８日、滝川一益が柴田勝家を訪ね、勝家にこう語りました。
「我々に味方する者は、ただ不破勝光、原政茂、金森長近、前田利家らだけである。今は偽って秀吉と和睦し、勝利するための策を練るべきである」
そこで勝家は、前田・不破・金森を呼び出して言いました。
「秀吉と和睦し、共に若い三法師を支えていきたいと思う。私の本心を秀吉に伝え、和平の儀式を取り結んでほしい。それが叶えば、私の喜びはこれに勝るものはない」
これを受けて、前田・不破・金森らは１０月下旬に越前・北ノ庄を出発して、深い雪を踏み分け、北風に耐えながら、京都へ向かいました。

賤ヶ岳の戦い と 長近

天正１１年（1583）２月、秀吉と勝家の対立はついに武力衝突に発展し、両者は現在の滋賀県長浜市で対陣しました。



「太平記」

府中（越前市）に拠点を置く前田利長が先陣となり、７日の明け方に出発し、木本（滋賀県北部）を目指して進軍しました。

これに続く軍勢は、不破勝光、佐久間安政、原政茂、金森長近らでした。前後の軍勢を合わせれば１万５千に及び、あちこちの村々に攻め入ってことごとく火を放ち、そのまま軍勢を引き揚げさせて柳ヶ瀬周辺に陣を構えました。

長近は「越前衆」として勝家に味方しましたが、４月２０日、賤ヶ岳（しずがたけ）の戦い（たたかい）（長浜市）が起こるとすぐに戦線を離脱したことで勝家軍は敗北。勝家は北ノ庄城（福井市）で自害しました。この裏切りは、先の偽りの和平交渉時に秀吉から配下になるよう誘われていたためと思われます。

なお、江戸初期に書かれた「金森家譜（かなもりかふ）」では、長近は秀吉の命を受けて勝家と戦ったと記されています。

「金森家譜」

天正１１年、羽柴秀吉は大軍を発して近江国へ向かい、織田信孝や柴田勝家ら諸将を征伐した。金森長近父子は豊臣家の命に従い、北近江で勝家と戦った。越前国の北ノ庄城にて勝家が滅亡したことにより、長近は秀吉に帰属した。また、秀吉が美濃国を征伐して岐阜城を包囲した際も、長近はこれに従って城を攻略した。信孝は逃げ出し、尾張国の野間にて自害した。

同１２年、秀吉と織田信雄が尾張国で戦った際（小牧・長久手の戦い）、長近父子は３，０００人の兵を率いて内窪山砦を守備した。

秀吉配下 としての 長近

賤ヶ岳の戦い後、長近は前田利家らとともに秀吉の配下となり、大野郡は秀吉の統治下に入りました。

「金森靱負由緒書」
天正１１年、徳川家康が味方をされていた柴田勝家と示し合わせ、秀吉と敵対しましたが、勝家が越前で討ち死にした後は、やむを得ず秀吉の配下となりました。この時、大野城十万石は秀吉によって没収されました。

秀吉配下となった長近は、以前と変わらず大野郡を治めることを許されており、信長配下時代に専福寺（友兼）宛てに出していた「安全保障」を更新しています。以前と変わらぬ保護を約束して、領内の安定維持を図ったのでした。

「金森長近安堵状」
友兼村のうち、専福寺が所有する屋敷地の一区画について、諸役（年貢の負担）を免除した。これについて異議を唱えてはならない。
天正１１年１１月２０日
金森長近
専福寺

こうした寺院を通じて領内を安定させる方策は、のちの高山でも実施されました。

なお、秀吉と長近の関係は良好で、秀吉の死後、その後継者として豊臣秀頼が大坂城（大阪市）に移る際に、秀吉の遺命によって長近が随行したと伝わります。それほど厚い信頼を受けていたのでした。



「金森家譜」
慶長３年８月１８日、秀吉公が没する。翌４年秀吉の遺命により秀頼の大坂城への移動に長近が供奉した。

長近 と 茶の湯

室町時代、武将たちは競うようにして茶の湯を取り入れました。次第に茶の湯は政治談議の場にも使われるようになり、茶人は政治にも意見を述べるなど、立場を強くしていきました。秀吉にも召し抱える茶人は多くいましたが、特に強大な影響力を持っていたのが、茶頭職（さどうしょく）の津田宗及（つだそうぎゅう）でした。

秀吉への降伏からわずか２か月後の６月１６日、長近はひとりで宗及を訪ね、二服の茶のふるまいを受けています。これは長近が秀吉から信頼を受けていたことを示しており、ひいては長近が治める大野も冷遇を避けることができたとも考えられます。



「宗及自会記」
天正１１年６月１６日 昼　金森長近殿　一人
一、布団釜を出して、葦棚に桶と合子を２つ置いた。
一、床の間には青磁の花入を飾り、前席と後席の間に、黄瓜の花を生けた。
一、薄板の上に、善好茶碗を置き、前席・後席で茶を点てた。

長近は翌年（天正１２年）３月には秀吉と蜂屋頼隆（はちやよりたか）の３人で宗及を訪ねて茶を飲んでいますが、この席では床の間の花を秀吉が生けており、ずいぶんと打ち解けていたことがわかります。

「宗及自会記」
天正１２年３月２日 朝　秀吉、金森長近、蜂屋頼隆
一、床の間には青磁の花入を飾ったが、水は入れなかった。敷板の上には台天目を置いた。
一、風炉には吉野釜をかけ、五徳には、籠、水指、金の合子を置いた。
一、前席と後席の間に、床に掛軸を掛けた。
一、例の青磁の花入れを中へ出して置き、薄板に据えて水も入れた。
一、その花入に、秀吉が自ら花を生けた。
一、薄茶は、ひずみのある高麗茶碗で点てた。
一、昼過ぎまで、秀吉は皆と話した。

長近 の 飛騨攻め（前夜）

天正１２年(1584)、長近はすでに６１歳になっていましたが精力は衰えず、石徹白（岐阜県郡上市）の在地指導者・石徹白長澄に命じて、姉小路氏（三木氏）が治める飛騨国内の情勢を報告させました。長澄は三木氏によって飛騨を追われた浪人達を多数養っていたようで、飛騨攻略にはこうした浪人衆の加勢も見込んでいました。

「金森穐文書」（福井県立文書館公開）

昨日の手紙が、今日（２３日）の午前１０時頃に届いた。そちらでの（敵や周囲の）噂の様子をさっそく報告してきたことは、もっともな判断である。

（略）

一、味方となる浪人たちへは、油断なく準備しておくよう伝えよ。こちら側も間もなく出陣するので、早々に情勢を知らせるように。　謹言

９月２３日 巳の刻　　金森長近

石徹白彦右衛門　殿

（追伸）

いよいよ油断なく報告することが最も重要である。また、先日送った案文（下書き）の通り、秀吉への返事を整えて、急いで待っている。飛騨の情勢がどのようであろうとも、我ら金森軍は状況の善し悪しに関わらず、郡上（岐阜県郡上市）まで出陣するつもりである。よって、返事を一刻も早く整えて送ってくることが第一に重要である。以上。



天正１３年５月、長近と妻・お福の二人の名前で白山別山山頂に仏像を奉納したのも、こうした石徹白との関係によるものかもしれません。

「金森可近氏所蔵文書」

（神体裏書）

天正１３年 中夏

信心大施主　越前国大野郡主　金森長近

同内儀御福女

敬白

白山社家最頂　石徹白彦右衛門長澄

和泉守家政

大工五分一の住人　藤原左衛門尉吉次

八郎左衛門

長近 の 飛騨攻め

天正１３年（1585）７月２１日から始まった秀吉による佐々成正攻めに従軍した長近は、目覚ましい活躍を見せました。

これを高く評価された長近は、８月２日、秀吉の命を受けて養子・可重とともに飛騨国へ攻め入りました。



「飛州軍覧記」（『飛州志』所収）

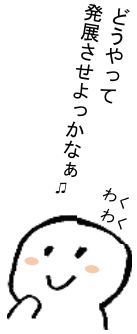
天正１３年の春、秀吉は越中（富山県）へと出陣して佐々成政を攻めた。成政はついに敗北して秀吉に降伏した。この時の戦いにおいて、長近の軍功は他の誰よりも際立っていたため、秀吉のご機嫌は非常に良く、数々の褒めの言葉を賜った。

秀吉が戦場から引き揚げる際、長近には「飛騨国を征伐せよ。自らの手柄次第でその地を切り取り、領地としてよい」との命令を下した。これを受けて、天正１３年８月上旬、長近（６２歳）は、養子とした長屋喜三可重（２８歳）とともに、二手に分かれて出陣した。

飛騨国内の数カ所で三木氏の軍勢が待ち構えていたため、金森軍は大軍とはいえ容易には攻め入ることができず、郡上の和良（岐阜県郡上市）を通り、下原（下呂市金山町）から攻め入った。

・８月６日、白川岩瀬橋（高山市荘川町）で戦う。苦戦するが、郡上の遠藤氏の救援により勝利する。
・８月１０日、白川牧戸城（高山市荘川町）を攻める。
・８月１３日、小鷹利城（飛騨市河合町）を攻める。同日、小島城（飛騨市古川町・沼町）を攻める。
・８月１５日、廣瀬城（高山市国府町）を攻める。
・８月１６日、鍋山城（高山市漆垣内町）に入り、本営とする。
・８月２０日、松倉城（高山市松倉町）を攻め落とし、飛騨攻めを成功させる。

長近 の 高山入り



天正１４年（1586）８月７日、秀吉によって飛騨国に封じられ、高山へ移りました。

高山での長近は、高山城を築き、高山城下町を整備して、大野と同様、領民の暮らしを豊かにさせました。

「藩翰譜」
天正１４年、飛騨国を領地として与えられ、高山に居住した【３万８千石を領有したという】。これは、長年の軍功を秀吉から賞賛された結果である。

「寛政重修諸家譜」
天正１４年、秀吉より飛騨一国を領地としてあてがわれ、３万８７００石余を領有して、高山城に居住した。

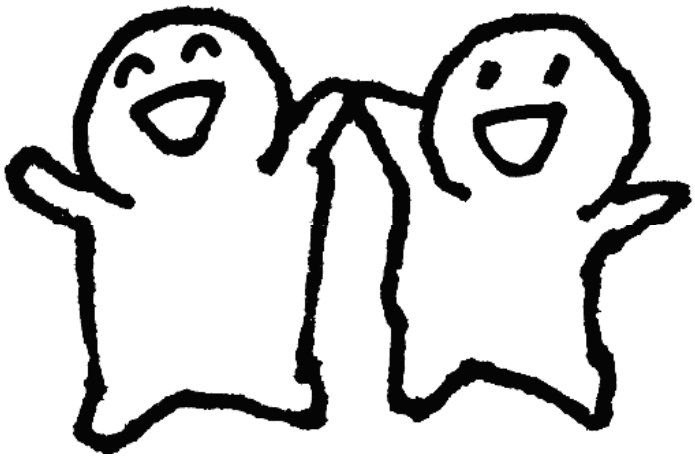
長近は高山を安定して治めるために、浄土真宗寺院として大きな勢力を持っていた照蓮寺（しょうれんじ）を白川郷中野（しらかわごうなかの）（高山市荘川町）から高山城下へ移転させ、自分の留守中の高山の治安維持に当たらせました。

「飛州志」
長近は白川郷の中野にあった照蓮寺の１３世・明了を呼び寄せ、自分が出陣する際に高山城（＝飛騨国）を警護し、民の叛乱を未然に防ぐよう求めた。明了がこれを受け入れたため、長近は飛騨国内の浄土真宗寺院のすべてを、照蓮寺末寺と定めた。
のちに、伏見城において秀吉から、出陣によって不在となるときに留守を任せることができる有能な臣下はいるかと尋ねられた際、長近は、照蓮寺の名を挙げ、その理由として、「国内に多くの門徒を持ち、他国の民も慕って集まってくる」と説明した。

その後も、長近のひ孫・従純（よりずみ）が照蓮寺１５世を継ぐなど、高山藩主金森家と照蓮寺は良好な関係を維持させていました。

長近 が つくる つながり

金森長近をきっかけに、大野市と高山市はさまざまな交流を持っています。



●近年の主な行政の交流

令和２年　金森長近にゆかりのある高山市と滋賀県守山市、大野市が「災害時相互応援協定」を締結しました。

令和４年　「金森長近公を学ぶ歴史講演会」を開催し、高山市など関係者が大野市に集いました。

令和６年　金森長近の生誕５００年を記念し、歴史博物館で特別展「金森長近公のあゆみ」を開催しました。

・飛騨高山まちの博物館が所蔵する史料や画像データを、展示で活用。

・記念講演会を開催し、一般財団法人金森公顕彰会の事務局長（当時）を講師として招く。

「金森長近公ゆかりの都市交流ツアー」を開催し、高山市民らを招いて市民交流を行いました。

上記の他にも、長年にわたり、歴史・観光・まちづくりなど多くの分野で、市民・産業・行政による交流が図られています。

羽柴（豊臣）秀吉から「飛騨国を平定せよ」と命を受けた金森長近が、越前国大野郡から飛騨国大野郡白川郷に入った時、ひとりの旅僧と行き会いました。

兵から、戦う前に曽に会うのは不吉であると罵られ、切り捨てられそうになった旅僧は、長近の戦勝を願う祝歌を即興で吟じました。

大将の召した袴は白革（白川）や
さても見事にとりし襞（飛騨）かな

大将がお召しの袴は、ここ白川の地にふさわしい見事な白革です。
そして、なんと美しく襞が取られていることか。
その襞のように、この飛騨国も見事に平定なさるでしょう。

長近はその機転を愛でて、旅僧に褒美を与えました。

『斐太後風土記』より

